

『ファウスト』第二部に於ける行為の救済

長谷川 茂 夫

ゲーテの『ファウスト』全編の結末となる「山峡」の場では、次々に登場する教父達そして天使達や童子達などがファウストの通り抜けるべき浄化と昇天の各ステージを言わば代理として具現してゆく。この時に今までファウストであった人格は、「さなぎ」の状態にとどまり、もはや個人として自己発現をすることはない。その理由として先ず挙げられるのは、『ファウスト』という壮大な作品の寓意劇という特性である。この特性について筆者は他の論文でも一貫して主張して来た。その一例を挙げると、古典的ヴァルプルギスの夜でガラテアがアフロディテの役割を勤めたように、古典古代の様々な神格や人物が、限られた例外を除き伝統的な名称を避けて登場することがある。なぜならば神話に於いて名前は本質と分ち難く結びついているものであり、有名なまたは無名の偉大な語り手達が作り上げ、磨き上げて来た超越的な力や運命の典型が、その名前に凝縮しているからである。そして寓意というものは、或る歴史的・文化的な背景なくしては成り立ち得ないがゆえに、自身の作品に堅固な表現を与えるため、このような神話的形象に或る程度頼りながらも、その一方で伝統的な意味内容の重みに囚われてそこへ全面的に依存することの弊害を避けるためにゲーテの用いた方策が、比較的下位の神格として、言わば文学的に成熟し切っていない名前を採用することであった。アフロディテという名前の代わりにガラテアを用いることで、同じ美の典型ながらも、そこへゲーテ独自の寓意を付与する自由度が確保されたのである。

では、この「山峡」でファウストは何故代理を必要とするのであろうか。中世の民間伝説から生まれたとはいえ、ファウストは殆どゲーテの創作した人物と言ってよいのではないだろうか。その答えは、この場面の本質と深く関わっ

て来る。即ち、ファウストの救済と昇天を実現すべきこの場面が、作品全体の総括として、ファウストという人物像が具現する問題性へのゲーテの解答を提出する役割を必然的に担わなければならないからである。ことここに至ると、ドラマの筋立ての中でファウストの行った行為の善悪は問題とならず、彼が最高のもので自分に課した「行為する」という原理に焦点が当てられる。それはとりもなおさず、ファウストの運命が個人としての偶然性を脱却し、人間全体の宿命として普遍的に捉えなおされるということである。即ち、ファウストの救済は、彼がその典型として一身に具現する原理の救済へと転化する。そしてファウストの現象的な個人性が背景へと退くのに比例して、救済の達成される構造が明瞭に浮かび上がって来るのである。

では、その過程をテキストに則って詳細に見て行こう。本論では「山峡」の場の全体を翻訳して引用した。¹⁾

山峡

森林、岩盤、荒涼たる土地

聖なる隠者達が山地を下から上へと階梯を成すように分散し、断崖と断崖の狭間に身を置いている。

合唱と木霊（11844～11853）

深き森は、靡き打ち寄せ、
磐石は、重く迫り来る、
樹根は、絡み纏わり、
幹は幹に接して延びる。
浪また浪が奔流となり、
底知れぬ洞窟がはぐくむ。
ライオン達は、優しく黙して
我らの回りを巡り、
清められた土地を、

聖なる愛の宿りを、崇める。

この合唱が後から登場する隠者達や教父達のどこまでの範囲から成り立っているのかは定かにされていない。合唱が「木霊」するという設定は、むしろ主体を明確化しないという意図があるためであろう。それは、ここで歌われている内容が導入部としての一般性を持つことと符合する。ここで導入された要素は、以後おのおのの教父によって逐次敷衍されてゆく。

ゲーテが『ファウスト』の掉尾となる「山峡」の場面で手始めとしたのは、四大元素のダイナミックな働きを呼び起こすことであった。それは、この土地の尋常ではない特性を簡潔かつ大胆に提示することで成されている。森は風に靡き、岩は聳え立ち、浪は逆巻き、稲妻が走る。四大元素が躍動し、生命力の根源が荒々しいまでに露呈されるのである。かつてファウストがノストラダムスの書を手引きとして生命力の根源を垣間見たとき、それは地霊の姿を取ってファウストを圧倒した。しかしここでの隠者達は強烈な生命力の中心に身を置いているが、彼らがそれによって滅ぼされることはない。なぜならばその原動力となり、それを支配しているのは聖なる愛の力だからである。ここでファウストの代理となる隠者達が、むしろ生命力の一部として受け入れられていることが、地上的である地霊の世界と、この「天上」世界との根本的な相違である。そしてファウストの「死後」に提示される世界の冒頭で、このように生命力が横溢する有様は、この「山峡」が天国へ至るための煉獄にあたるものではなく、それ自体が既に新しい世界であることを如実に物語っている。

法悦の教父、上下に浮遊しながら。(11854~11865)

永遠なる歡喜の炎

燃えあがる愛の絆

煮えたぎる胸の痛み

泡立つ神の熱情。

矢じりよ、私を貫け、

手槍よ、私を打ちひしげ、
こん棒よ、私を打ち砕け、
稲妻よ、私を焼き尽くせ、
虚無なるものはすべて
束の間と成れ、
永続の星よ輝け、
とわなる愛の精髓よ。

「浮遊」する教父という発想が『イタリア紀行』に記されたフィリッポ・ネリに由来することは、注釈者達によってつとに指摘されている。しかしここでは、この歴史的人物が「法悦の教父」像の形成に与えた影響を考察する必要はないであろう。浮遊するという特性を与えることによって、ゲーテはこの土地と住人達の特殊性を明示したかったのである。ファウスト死後の舞台転換によって場面が再び日常世界へと戻ったのではないことを、前節のライオンの不思議な行動は概念的に、そして浮遊は視覚的に、観客へと提示している。また内容的には、この教父とネリとの関係よりも、教父とファウストとの共通性の方に注目すべきである。法悦の教父は、その浮遊能力が示すように、或る程度の非地上的な超越性を備えてはいるのだが、自分自身を含めて刹那的な地上の生を完全に否認し、永遠という絶対性を熱望している。しかしそれは、反面から見れば、未だ地上的なものからの完全な脱却を果たしていないことの証左なのである。そして彼がここで示している否定的な語法は、第一部冒頭でのファウストがすべての知識の有効性に断罪を下す、あの有名な独白への連想を促す。またそこに示される熱狂は、『ウアファウスト』を執筆した疾風怒濤時代の若きゲーテの心情を代弁するかのようである。この親近性から言えば、登場人物がファウストの代理となるという作品構造の中で、教父は、ファウストがこの最終幕へと至る道筋のそもそもの出発点をここにまた新たな発端として据える役割を果たしているのである。

深遠の教父，深層で。(11866～11899)

それはちょうど，断崖を成す岩が私の足元で
深い奈落の上へ安らかに重なっているようなもの，
それはちょうど，千筋の小川が煌めきながら流れて
泡立つ奔流の恐ろしい滝となるようなもの，
それはちょうど，自らの力強い衝動により真つすぐに
木の幹が大空へと聳えるようなもの。
それこそが全能の愛であり，
すべてを生み出し，すべてを育む。

あたりには激しい物音がざわめき，
まるで森や岩盤が波打っているかのようです。
でもしかし，愛に満ちた轟きを立てて
溢れる水は滝壺へ落下してゆきます，
そのまま谷を潤す使命を帯びて。
炎を成して落下した稲妻は，
浄化の役目を果たします，
毒を孕み濁った大気を。

これらは愛の使い，そして知らせるのです，
永遠に創造しつつ私達の回りに漂うものを。
それが私の内部にも火を灯してくれんことを，
そこでは精神が，惑い，凍え，
きつく巻かれた鎖の痛みにも似た，
鈍い五官の限界のなか，虐げられています。
神様！乱れる思いを静め，
私の乏しい心を照らして下さい。

上の「木霊と合唱」で提示された生命力の賛歌が、ここで深遠の教父によって敷衍されている。「岩」、「奔流」、「稲妻」、「ざわめき」などに地水火風の四大元素の働きが凝縮して提示され、またそれらを束ね、総てを育む愛の力が改めて称えられるのである。この四大の生産性賛美は、「古典的ヴァルプルギスの夜」の過程を経て死と忘却から呼び返されたヘレナが再び冥府へと戻ったのちに、彼女の分身とも言える合唱隊によって歌われたものを思い起こさせる。しかし「山峡」の場における生命力の謳歌が、かつての「翳深き杜」におけるものと異なる点は、上述した愛の要素と、そして新たに浄化の要素が加わったことである。浮遊する教父の宿る天上的な「聖なる愛の宿り」に於いても、その大気は「毒を孕」んでいた。それは、この地帯が昇天過程の未だ低い段階に位置していることを意味するだけではなく、四大元素の働きによって活性化される生産性そのものにも、完全に清浄ではない要素が内在することも明らかにしているのである。そして、そのような生産性に裏打ちされた地上的な営為は、必然的に何某かの欠陥を伴わざるを得ない。人間の活動性が無垢のものとなるためには、先ずその基盤となる生産性が浄化されなければならない。現象的には本来不可能であるこの業は、「全能の愛」によって成し遂げられる。言わば地上的な生産性が止揚され、天上的な聖なる生産性が確立されるのである。

深遠の教父をファウストの発展段階の中に位置付けるとすれば、極端な主観性を脱却して、世界の中に置かれた自己を客観的に認識し始める第二部が該当するだろう。深遠の教父の口調は、法悦の教父の熱狂的な自己中心性と比べると、遥かに客観的で冷静であり、その認識も一段と高められているからである。彼は、この場所に「愛の使い」が派遣されており、その働きを及ぼしていることを知っている。しかしながら彼自身の思念はやはり地上的な感覚の限界内に囚われているので、そこからの解脱を真摯に願っている。

これら二人の教父は、いずれも地上性の残滓を拭い切ってはいない。そして彼等が「山峡」の場でファウストの「不死なるもの」と直接的に触れ合うことがないのは、ファウストの地上での境地に併置される天上での存在としての役割を、彼等がその本質の一部として担っているからではなかろうか。即ち、彼

らはファウストが地上で送った精神生活の総まとめともなっているのです、そこから抜け出て来たファウストの「不死なるもの」と再び出会うべきではないからである。

しかし彼等の次には地上的性格から完全に自由な者達が登場し、本格的にファウストの天上での代行者となる。それが「昇天する童子達」である。そしてこの童子達に接する教父は、前述の二人よりも更に上位の境地にある。「天使セラフィムのような教父 (Pater Seraphicus)」は、愛の存在を「神の現存」として認知するだけではなく、彼自身が「愛するもの」である。彼は前出の二人の教父のように自らの不完全性に悩むことはない。しかし、その彼といえども、童子達の清浄さと比べれば、やはり地上的であることが、直ぐに明らかとなる。

天使セラフィムのような教父、中層で。(11890~11893)

なんと見事な朝雲が漂うことか、
揺らめく髪のような樅の木立を抜けて。
さて、あの雲の中で生きているものとは？
あれは、幼い霊達の群れだ。

昇天する童子達の合唱 (11894~11897)

お教え下さい、教父さま、私達が漂っている所はどこなのでしょう、
お教え下さい、善き人よ、私達は誰なのでしょう。
私達は幸せです。私達のみんな、みんなには、
こうしていることが、とても安らかなのです。

天使セラフィムのような教父 (11898~11913)

童子達よ！真夜中に生まれたもの達よ、
半ば開かれた精神と五官よ、
二親には直ぐに失われたもの、
天使達には授かりもの。

ここに一人、愛するものがいあわせることを、
君たちはきっと感じ取っているのだ、だからさあ近くへ。
だが、幸いなるもの達よ、君達は、
険しい地上の道筋の痕跡もとどめてはいない。
さあ降りて来なさい、そしてはいりなさい、私の目の、
世界と地上に適った器官へと。
それを君たちの目として使えばよい、そして
この周りをよく見てごらん。

教父は彼らを自分の中へ取り入れる。

あれが樹木だ、あれが岩山で、
水流がたぎり落ちている、
そして物凄い迸りとなって
険しい道程を切り詰めているのだ。

「真夜中」に臨終を迎えたファウストは、この後まもなく「真夜中に生まれた」童子達の仲間となる。即ち、ファウスト上昇の階梯を童子達が引き継いでゆくことになる。それゆえファウストとこれらの童子達との親近性の抛り所を考察することは重要であろう。彼等は、後出の「贖罪の女」とファウストの間に介在する働きも担っているのだが、それはファウストがグレートヒエンとの間に儲けた嬰兒を共通項としているのかも知れない。しかし、童子達が「幸いなるもの達 (Glückliche)」と呼ばれるとき、本論で後述する意味合い以外に、ファウストのラテン語形 Faustus の意味、即ち「幸運なるもの」までをゲーテが意識して用いたのかは、不明である。²⁾

キリスト教の教義から言えば、生まれて直ぐ死んだ幼児でさえも、原罪を免れ得ない。しかしゲーテはこの教義に拘泥せず、——原罪に対するゲーテの否定的な見解は『牧師の手紙』から読み取れる。「原罪について私達は何も出来

ません。そして現実の罪に対しても同様です。それは足のある人が歩くのと同じように自然なことなのです。』³⁾ ——童子達に彼独自の特性を与えている。即ち、肉体として地上に存在したことの無い童子達には、地上的な存在に対して必然的にまとわりつく行為=罪の方程式が適用されていない。この特性は、童子達に仮初めの肉体性が提供され、地上における諸元素の荒々しい活動が示された時に見せる彼らの拒絶的な反応にも暗示されている。

昇天する童子達、内部で (11914~11917)

ほんとによく見えますね。

でもこの中は暗すぎます。

怖くてぞっと身震いがします。

気高いお方、優しいお方、私達を放して下さい。

童子達にとっては天使セラフィムのような教父の肉体であっても、それが肉体であり、本質的に地上の存在である限り、暗鬱たるものに思えるのである。

童子達はすぐさま解放され、彼らに相応しい、より高く清澄な階層へ昇るよう促される。そこで彼らは非物質的で清らかな糧を享受し、非肉体的な霊として成長することを期待されている。

天使セラフィムのような教父 (11918~11925)

もっと高い階層へ昇ってゆくがいい、

いつもそれと判らずに成長するがいい。

それは、永遠に清らかな流儀で、

神の現存が力づけるままに。

なぜならそれこそが、霊達の糧であり、

自由このうえない天空を満たすものだから。

永遠(とわ)なる、愛することの啓示であり、

至福へと花開くものだから。

